



254号
2020/6

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



丹巴での美人コンテスト：丹巴風情の美女コンテスト入賞者。ギャロン(女王谷)には色々な部族が暮らしていて、美女コンテストにも色々なタイプの美女が参加して競います。この若い女性は西域風のハッキリした目鼻立ちとスラリとした立ち姿が印象深く、会場から盛んに拍手を浴びていました。

(2012年10月、四川省丹巴県にて 四姑娘山自然保護区特別顧問=大川健三 撮影)

'わんりい' 2020年6月号の目次は20ページにあります

今月今月の言葉、日本語では「兎死すれば、狐これを悲しむ」と言うそうですが、日本では余り一般的ではありませんね。

・>・>・>・>・>・

大きな森な中に、仲良しのウサギとキツネがいて、いつも一緒に楽しく遊んでいました。

ある日、ウサギは猟師の矢に当たって死んでしまいました。キツネはかわいそうなウサギの姿を見て、大泣きしました。

フクロウは不思議に思って、訊きました：

「キツネさん、どうしてそんなに泣くんだね？」

キツネは答えました：

「ウサギくんは僕の仲良しだったんだけど、もう死んでしまったんだ。こんな悲しいことはないよ。それに、僕もウサギくんと同じ弱い動物だから、ウサギくんと同じように死んでしまうに違いないと思ったら、もっと悲しくなったんだ。泣きたくなるのは当然でしょ！」

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：ウサギが死んでキツネが悲しむ。これは同類の不幸を悲しいと感じるという比喻です。

使い方：自然が破壊されると、多くの種類の動物が絶滅してしまう。キツネがウサギの死を悲しむように（明日は我が身と感じて）、更に多くの動物が自分たちの将来を心配しているだろう。

・>・>・>・>・>・

中国では、各王朝が亡んだ後、次の王朝は自分達の前の王朝の歴史を編纂する決まりがあります。清朝乾隆帝の時代に、各王朝の歴史を選んで、「二十四史」として中国の正史としました。宋史は「二十四史」の一つで、元の時代に、宋代の歴史を

纏めたものです。

宋は960年に建国され1279年まで続きますが、途中1121年には北半分を女真族の金に奪われ、都を開封から臨安に移して、南宋となります。その後、国力の衰退した金に替わり、北からモンゴル族が進出して来て、1279年には南宋も滅亡して元朝が成立します。

宋に変わって中国に国家を打ち立てた元は、慣例に従って宋の歴史を編纂しました。

が、異民族国家である元朝は、歴史に対する思い入れも漢民族とは違っていました。

元朝は、短時間のうち300年に及ぶ宋代の膨大な資料をまとめたので、史書としての統一性に欠けると、後世の宋史に対する評価はあまり高くありません。

このお話は、そんな宋史の中

の李全伝に出て来るそうです。同じことを逆にして、「狐死兎泣(こしときゅう)」(キツネが死んで、ウサギが泣く)とも言います。因みに、キツネとウサギは、中国では悪者と目されているので、これは、裏切りが横行した時代、仲間内の話らしいのですが、此処では勿論そんなことまで踏み込みません。単に、森の中の可愛い動物、ウサギとキツネのお話として紹介しています。

李全伝の李全という人は、モンゴルの進出で金が南へ遷都してしまった後、山東省で農民を束ねて自衛の盗賊団を組織した人物だそうです。乱世の中で、人々は明日をも知れぬ日々を送っているので、こんな言葉も出てきたのでしょう。

日本語で言うと、「同病相哀れむ」とか「明日は我が身」といったものが、意味を同じくする言葉でしょうか。



挿絵 満柏氏

桃 夭 詩經

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

とよ よ
桃 夭

詩經・国風・周南

桃よめでたや

はな
華晴れやかに

とつ
この子嫁げば

むこ
婿さに似合う

桃よめでたや

み
実はふくよかに

とつ
この子嫁げば

おや
舅姑にも似合う

桃よめでたや

葉はふさやかに

とつ
この子嫁げば

うちじゅう
家中に似合う

『詩經』は中国最古の詩集です。紀元前 10 世紀前後から同 5 世紀にかけて歌い継がれてきたもののうち、孔子が 300 余首を選んで編纂したと伝えられ、儒教の経典として重んじられてきました。

内容は「風」(国風=各地の民謡)「雅」(宮廷雅楽)「頌」(宮廷・諸侯の宗廟歌)の三種に分かれています。ここに取り上げたのは「風」の中の一首で、婚礼の祝い唄として民間で歌われていたものかと思われます。「周南」は国風冒頭の篇名で周代初期の都周辺の地域(今の西安付近)を指すと言われています。

これから嫁いで行こうとする若い娘の艶やかな姿と、その幸せを願う周囲の人たちの温かい心が歌い込まれています。「桃」は若い女性、「華」は美

貌、「実」は子宝、「葉」は一家の繁栄をそれぞれ表しています

[原詩]

táo wāi
桃 夭

táo zhī wāi wāi zhuó zhuó qí huá
桃 之 夭 夭 灼 灼 其 华

zhī zǐ yú guī yí qí shì jiā
之 子 于 归 宜 其 室 家

táo zhī wāi wāi yǒu fén qí shí
桃 之 夭 夭 有 蕢 其 实

zhī zǐ yú guī yí qí jiā shì
之 子 于 归 宜 其 家 室

táo zhī wāi wāi qí yè zhēn zhēn
桃 之 夭 夭 其 叶 蓁 蓁

zhī zǐ yú guī yí qí jiā rén
之 子 于 归 宜 其 家 人

[訓読]

もも ようよう
桃の夭夭たる

しゃくしゃく はな
灼灼たるその華

こゆ とつ
この子于き帰ぐ

そ しつか よろ
其の室家に宜し

もも ようよう
桃の夭夭たる

ふん そ み
蕢たる其の实有り

こゆ とつ
この子于き帰ぐ

その かしつ よろ
其の家室に宜し

もも ようよう
桃の夭夭たる

そ はしんしん
其の葉蓁蓁たり

こゆ とつ
この子于き帰ぐ

その かじん よろ
其の家人に宜し

中原旅行記（3）2020年1月1～6日 橋 詰 滋

■1月4日 開封へ

6時に起床の予定が、前日のマッサージの好転反応のためか、熟睡しすぎ、ようやく7時少し前に起床。8時にチェックアウトをし、高鉄の洛陽龍門駅までホテルの送迎車にて送っていただき、駅には8時20分に到着しました。列車の出発時間まで1時間近くあったため、駅構内の売店を物色して時間をつぶしました。9時39分に山東省栄成行きに乗り込み、1時間くらいで開封北駅には定刻通りに到着しました。

開封北駅は市街地から10キロほど北に離れた位置にあるため、アクセスがかなり不便であります。中国の高鉄の駅の多くは、郊外にあり、駅周辺には数棟のマンションがあるだけで、ほとんど更地の状態です。日本の新幹線の新横浜駅も開業当時は農地のど真ん中であつたそうだから、それと同じで、将来、駅周辺の開発が進むと思います。

駅からはタクシーに乗り込み、30分くらいかけて、この日のホテルに到着しました。この時点で11時です。朝食を抜いているため、空腹に耐えかねて、宿の近くの食堂でランチをしました。メニューはワンタンスープと肉挾膜(パイ生地で肉を挟んで焼いたもの)のセットです。食後は、タクシーに乗り開封で一番の観光地である龍亭公園に向かいました。

この開封の詳細については、4月号から掲載が始まりました村上直樹氏の「河南省或いは「中原」雑感」において、説明がされていますので、そちらをご覧ください。

龍亭公園は北宋の時代の建築物や庭園があり、北宋の文化に触れることができます。隣接地に清明上河園という北宋の街を催したテーマパークもありますが、龍亭公園を見れば十分であると私は思います。公園内には売店があり、北宋の清明上河図の絵画のレプリカが売っていましたが、見ているうちに衝動買いしてしまいそうなので、なるべく視界から外し



龍亭

て行動しました。龍亭公園で一番のメインは龍亭であり、北宋の皇帝の拝謁が行われた場所でもあります。高さは約25メートルであり、頂上から市内を一望できると思いましたが、龍亭公園から北東に2キロの距離にある鉄塔公園にあるはずの60メートルの高さの鉄塔が全く見えません。視界がすごく悪いのか。確かに、中国に来てから、北京を除いて、視界が良好だった記憶がありません。

龍亭公園の見物後は、鉄塔公園に移動しました。鉄塔公園の入口に到着しましたが、入口から500メートル先にあるはずの鉄塔が全く見えません。本当にこの公園内に鉄塔があるのだろうか心配しましたが、入口から300メートルぐらい進んだところで、ようやく鉄塔が見えてきました。

鉄塔は今から1000年前に建造されたものであります。鉄塔の中に入り、上まで登ってみました。階段は非常に狭く、急で、更に暗いです。スマホの灯りを頼りに上り進めていき、10階くらいまで登ったところで、しばし休止しました。あと何階分を登らなければならないのかと思い、上から降りてくる人に、残りの階数を尋ねたところ、あと3階分ということで、最後の力を振り絞り、登り切りました。最高階は人が一人しか入れるスペースしかなく、外の景色もスモッグであまりよく見えませんでしたので、早々に退散し



包拯の蠟人形 皮膚の色が黒いことで有名です



開封府の門

ました。鉄塔見学後は、公園内を散策し、次の目的地は包公祠に向かいました。

包公祠は北宋の政治家である包拯を祀った祠であります。包拯は清廉潔白な政治家(開封府の知事)であり、日本で言えば大岡越前のような存在であります。私情を挟むことなく、更に付度することなく、ただ法に則り、罪人を裁いてく姿が、中国のテレビドラマや映画等で描かれ、極めて人気が高いです。包拯の業績が紹介されたコーナーもあり、湖のそばにあるため、風光明媚な庭園もあります。40分ばかり見学したのち、湖を眺めながら徒歩で20分かけて包拯が執務をしたという開封府に向かいました。

この時点で17時であります。開封府の開園時間は18時までとなっているため、1時間ばかりの見物となります。開封府内には見所が多く、ゆっくりと見ていたら、時間があっという間に過ぎ去り、閉園10分前となってしまいました。

まだ、見切れていない状態であったにも関わら

ず、自分の後ろで係員が早く帰れと言わんばかりの咳払いをするので、追い払われるように退場するしかありませんでした。残念ながら、出口付近にある庭園だけは見ることはできませんでした。

開封府から退場した後は、昼間に龍亭公園に行ったときに気になった開封名物の灌湯小籠包を食べるために、2キロあまりの距離を徒歩で移動しました。しかし、龍亭公園の近くの店は、公園の開園時間に合わせ、ほとんどが閉店していて、開店している店は2軒しかありませんでした。そのうちの一つに入店しました。灌湯小籠包は、我々が良く見る小籠包と少し異なり、餡に羊肉を用いていて、羊肉のほのかな香りを感じながら食べました。

食後は近くのスーパーマーケットで開封名物の花生餅を買い、ホテルに戻り、23時に就寝しました。

わりりの5月号掲載の村上直樹氏の記事に、開封のユダヤ人のことが紹介されています。この記事で、私はヨーロッパや中東周辺にしかいないものと思われていたユダヤ人が、北宋の時代にははるか離れた東洋の国まで移住し、更に、ヨーロッパであったような民族的な差別を受けることなく安住していたことを、初めて知りました。この情報を旅行前に知っていれば、今回の開封旅行も、もう少し滞在期間を延ばして、ユダヤ人に関する史跡を巡ることもできたのかもしれませんが。機会があれば、再訪し、ユダヤ人居住の痕跡も巡ってみたいと思います。



開封府で会った猫

(続く)

海外出張の思い出（クウェート編②）

高島敬明

クウェートは、ペルシャ湾の一番奥にある四国と同じくらいの広さの国です。1961年にイギリスから独立しましたが、それまでは長くオスマン帝国の支配下にありました。

20世紀初頭までは天然真珠の交易が最大の産業であり、外貨収入源でしたが1930年代に入り、日本の御木本幸吉が真珠の人工養殖の技術開発に成功したため深刻な経済危機に見舞われたのです。それを救ったのが大油田を掘り当てたことです。以降石油産業が国の主要な産業となったのです。海外出張に行った（1983年）頃は、人口が200万人くらいと言われていた小さな国です。石油が豊富で多くの庶民の暮らしは、比較的安定した豊かな暮らしをしています。全人口のうち当時クエッティーと言われていた本当のクウェート国籍の人は約60万人くらいと言われていて、その他インド、フィリピン、バングラデシュなど多くの国の出稼ぎ労働者が70%ぐらいを占めている国です。

軍隊、警察、家政婦など出稼ぎ労働者がたくさん働いていました。クエッティーの富裕層はけた外れの金持ちですが、最下層の人々を救済するためにタクシー運転手だけはクエッティーでなければ職業に就くことは出来ないという決まりがあります。その分収入は保証されていたようです。そんなわけで我々の車もタクシーが絡んだ事故だけは避けるように厳しく指導されました。絶対に責任回避できないのだそうです。

現場事務所に入り国策企業 KNPC の制服を渡され、毎日毎日砂漠の中のコンテナハウスと事務所、建設現場の行き来だけの単調な生活が始まりました。我々の仕事に就いては出向という形をとっていますので、会議や個々の打ち合わせと現場の工事状況の

把握と上部への報告は、今までと違って現場で自分から動いて仕事をするようなことはありませんでした。主にインド人を指図するわけですが、私のペアーは学校を出て間もない通関士のMさんが得意の語学でインド人20名くらいを前に、ホワイトボードに図を描いて流暢な英語で説明をしていきます。頼もしい限りでした。そんなわけで工事で苦勞した記憶は



クウェートタワー（水道塔）前での筆者
（1983年2月）

なかなか思い出せません。そんな小さなコミュニティの中で噂話が流れ出しました。出向先会社のこの現場でも相当な地位の方がクウェートの現場に赴任してまもなくして、仕事に出てこなくなり自室に閉じこもったままの状態になり、食事も部屋に運んでいるとのことでした。会話をするでもなくお気の毒でしたが、精神的に参ってしまったようです。我々と同時期に現場に入られたようでしたが、飛行場では焼けただれた旅客機の残骸を見せつけられ、内陸部のキャンプは緑の木一本もない土漠の真っ只中で、右も左も分からなく非常な圧迫感のある

中では海の民日本人は精神的に参ってしまうようです。そんな噂がいくら口止めしても一気に広がってしまったようです。幹部として将来のある人でしたので一か月幽閉されたような状況でしたが時間をかけて本人の将来に傷がつかないようにお帰りになったと聞きました。

気候風土のことはもちろん、国内とは全く違った仕事の状況から来る重圧は計り知れないものがあったのでしょうか。我々は鈍感なのかそこまでは考え込むことはなく時が過ぎて行きました。誰が勧めたのか粉状のアルコールも全くアルコールにならないで飲料に適したお酒になってくれません。私も理論的におかしいと思っていましたが、皆さんの喉を潤すお役には立たなかったようです。全く熱い日々が続

きます。電線に停まった日本より幾分小さめの雀が気温が50度近くなると電線からどさっと下に落ちます。何回も目にしましたが、あまりの暑さに雀が気絶するのだそうです。重機の補強用の鉄板の上に卵を垂らすとジュッ！と瞬時に目玉焼きになってしまいます。これらの事象を見ながらそろそろサイレンが鳴らないかな！と期待します。というのは50度を越えたら戸外での仕事は中止になるのです。石油産業はほぼ国策会社が占めていますが、暑さの為作業中止になった場合その時間に見合う保証が国から頂けるそうです。ところが50度を超えてもなかなかサイレンは鳴りません。時間と我慢の競争です。それでも作業中止のサイレンは私の滞在中には3回ほど体験しました。

休日には新人の我々は2台の車に便乗しクウェートの町に繰り出しました。高さ200メートルのクウェートタワーは物珍しいのですが、ただ写真を撮るだけです。昼間から暑い街中を歩く人は、観光客を別にして非常に少ない感じでした。それに引き換え夜のバザールでは老若男女問わず人でいっぱいです。夕涼みがてら繰り出すのが非常な混雑です。バザールは重厚な金細工の市場です。ネックレス等は細かい細工の入った高いものばかりです。金の量り売りもありました。また豆類、ナツメのような果物を乾燥したもの、それに遊牧民には財産でもあるペルシャ絨毯、布もたくさん売っています。男物の頭からかぶる白い1メートル四方くらいの布、頭の上に乗せるリング。これは思ったより重く当初頭に乗せた布が飛ばされるのを防ぐ重しと理解していましたが、リングと布の色によって決められた階級を表すとのことでした。女性はナイジェリアと違って戒律が厳しく、肌は絶対に人には見せません。頭から被るショールで体を覆い、中にマスクのような布で顔も隠します。中には目の形をした切れ目状の、目だけ出す布を巻いて目だけ出して歩いている人が多く見られました。なぜか目だけの女性はすべて美人に、また若く見えるから不思議です。バザールは凄い人混みです。物珍しくふらふらと歩いているわけですが、そのショールの女性にぶつかろうものなら警察に連行されるそうです。正確には私服を着た宗教警察です。女性の

体にみだりに触ったということだそうですが、普通の警察官はインド人、バングラデシュ人が多いのですが、宗教警察は純粹のクエッティーが多いので厄介な問題になります。日本人もいや日本国も国際問題になる寸前のことがたくさんあるそうです。

実は入国時にこの種の問題に関する教育がイスラム世界のいくつかの国で起こった問題の例を挙げながら何度も行われました。例えば当社のイラクの事務所の若い社員が現地の女性と関係を持ち子供ができてしまったそうです。一般的には女性は結婚の条件として結婚前には処女でなければならず、また親戚一同が結婚に賛成しなければならないのだそうです。それに反すると親戚、親兄弟からの私刑が待っているのです。逃げても逃げても何年間も追いかけるそうです。日本のかたき討ちのような感じです。結局その女性は、悩みぬいた末自殺してしまったそうです。若い日本の社員はパスポートを没収され国外追放となり日本にも帰国できなくなってしまいました。そのような国際問題、人権問題の一步手前の事件がいっぱいあるそうです。またサウジアラビアの王女がこのような事件を起こし、体を首まで地中に埋められて地上に出ている頭に通行人から石を投げつけられ、石内の刑で死刑執行されています。

市中見学の話からそれてしまいましたが、帰り道砂漠の中の埃っぽい道路を走行中、物売りの小屋が沢山あります。何もない砂漠で何を売っているのかと、見に行くことになりました。そこにはワインの瓶より少し大きいオレンジジュースに似た色をした飲み物を売っていました。それは砂糖とイースト菌、それにかき回す小さな棒状のもので一式10ドル前後だったと思います。何だこれは？と思いましたがすぐ皆さん気が付きました。入国時の税関はお酒に対しては非常に厳しいのですが、お酒の取り締まりの抜け道だったのです。皆さん面白がって土産もかねて何本も買い込みました。帰って聞いてみるとこの方法でお酒を造っているとのことでした。今回は、ここまでとしますが次号では、これらからある器具を使ってアルコールを造ることから始めます。

(続く)

退職ジャンボ機長の回想⑦ 貨物機に乗務 柳田秀明

■ジョギング

私はゴルフもテニスもしましたが下手です。パチンコも下手で球の小さな遊びは全てだめです。しかしソフトボール以上の大きな球のスポーツが得意でした。バレーボール、バスケットボール、サッカーなどです。こんな中でもジョギングは道具もいらず、一人で遊べてお金もかかりません。私がジョギングを始めたとき、500メートルも走るとすぐ息が上がりました。しかし慣れてくると走った後は体も気分も軽くなり、次第に走るのが病みつきになってきました。各地の滞在先でのジョギングの話をしてします。

ロンドンでは一番大きなハイドパーク公園と道路を挟んで隣のケンジントンパークの中を走りました。新宿御苑と代々木公園を合わせたくらい大きな公園です。歴史を感じさせる太い幹の森、大きな池、四季楽しめる草花が整備されていました。公園の中には犬を連れて散歩する人も多く、犬は必ずつながるように立て札が書いてあるにもかかわらず、犬をつなげずに散歩している人もよく見かけました。

パリでは早朝のセーヌ川の川岸を走りましたが、兩岸は共にコンクリートでゴミも散らかっていることが多く、繁華街の早朝を走っているようで風情はあまり感じませんでした。隅田川の川岸の方がずっと掃除がゆき届いていて風情があります。

ドイツのデュッセルドルフではライン河の土手を走りました。ライン河は国際航路になっているのか、各国の国旗を掲げて貨物船が河を上り下りしていました。河岸に沿ってコースはよく整備されており、樹木も手入れされていて気持ちよく走れました。他にはアムステルダム、コペンハーゲン、フランクフルトやハンブルグなど行く先々でジョギングをたのしみました。

1989年8月に予定通り私は3年のアンカレッジ駐在員の任務を終えて日本に単身帰国しました。アンカレッジに家族を残したのは子供達の日本での学校の始業と娘の大学入学が4月から始まるからです。私一人で帰国してもアンカレッジと成田を毎月何回



747-400の操縦席（日本航空のポスターから）

か往復すると予想していました。しかし帰国すると私は直ちに機長養成の路線操縦教官室に所属が移り、国内線ばかり乗務することになりました。アンカレッジに乗務したいとスケジュールをお願いしても二か月に一度位しか乗務できず、さらにこの年の12月15日にアンカレッジの南西160kmに位置するリダウト山が大きく噴火してその火山灰のためアンカレッジ空港が長いこと閉鎖されてしまいました。

私は横浜で一人生活を始めた当初はとても新鮮でした。仕事以外の時間は全て自分のものです。一人分の洗濯や料理は少しも苦になりませんでした。しかしすぐに一人暮らしは大変なことが分かりました。分別ゴミと曜日別のゴミ出し、宅配便の受け取り、留守電の対応、回覧板のチェックなど雑用がひっきりなしです。家内の有難さがよく分かりました。

予期せず教官に任命されて、私は自分が機長訓練生の時の記録を読み返しました。どうしたらよい教官になれるかとの思いからです。教官と言っても自分の機長経験による若干のアドバイスを除くと、基本的には機長訓練生に教えることなどほとんど有りません。操縦するための通常操作や故障時操作、緊急操作を含め全ての手順は、飛行規程、運航規程、訓練規定などに記述されているからです。機長訓練生（機長の操縦技術の審査に合格している）が操縦していてもお客様をお乗せしているフライトですから、飛行の安全性、定時性、快適性は絶対に保証されなければなりません。教官はその保証のために乗っているのです。機長訓練生が機長になるのは、教官から教え

てもらおうのではなく、自分で機長の仕事をマスターするものです。日本航空で3年間教官の仕事をしてから、日本航空の子会社の日本アジア航空に教官として出向しました。この会社は当初は日本と台湾及び香港のみ運航していました。当時から機長が不足していたので、日本航空はこの会社でも機長養成をしていたのです。機長訓練生は機長席で操縦技術の演練は勿論のこと、悪天候時には現在の天候の回復予想、燃料の残量、代替空港に行く燃料など、多くの情報を考慮しながらも着陸するか否かは自分で決めるのです。お客様も、会社も、客室乗務員も誰もが目的地に着陸して欲しいのです。しかし上空での待機時間、残存燃料を考慮して目的地に着陸しない決断をすることもあります。こんな経験を積み重ねて教官のサインをもらい審査に合格し、社長から機長の辞令を頂いて機長になります。私の時は長距離マラソンを完走した時と同じように感じました。

日本アジア航空でのあるフライトのことです。機長訓練生が機長席で操縦して台北桃園国際空港に着陸の為の進入をしているとき、折からの台風の影響で天候は悪く、大小の積乱雲が空港近くに幾つも有りました。積乱雲は機上搭載の気象レーダーで赤く写ります。それらの雲を避けながらやっと最終進入を開始しましたが、飛行機は積乱雲の外側にある上昇気流に遭遇しました。機長訓練生がエンジンを絞っても絞っても計器速度が増加していきました。明らかに通常の操縦と異なりました。上昇気流があるとその近くには必ず下降気流がありバランスがとれているのです。下降気流に遭遇するかも知れないと予期していると地上500メートル位に降下したとき下降気流に本当に遭遇しました。コンピューターは風の急変を警告し、機の降下率が過大だと警報を出しました。こんなときマニュアルでは着陸復行を直ちにすよう定められています。私は機長訓練生に“GO AROUND”すなわち“着陸復行”と叫びました。この時機長訓練生は滑走路を視認していて、見えています、見えています、と言いながら進入を続けました。私は直ちに“I have control”すなわち“私が操縦する”と言って操縦を替わり、直ちにエンジンレバーを最大推力まで進め、機首を20度くらいまで上に引き起こして着陸復行を開始しました。しかし飛行機

は下降気流のため降下が止まらず滑走路の手前の空き地に向かって降下を続けていました。私はこの時地面に接地したらエンジンを切って緊急脱出をする手順まで頭に浮かびました。自分でもかなり冷静だったことを覚えています。地上では風は前後左右にしか吹きませんが上空では更に上下にも吹きます。かなり低高度になってから飛行機は下降気流から幸運にも抜け出て力強く上昇を開始しました。飛行機を立て直してから管制官に状況を説明し、再度機上搭載レーダーで空港付近の積乱雲の状況を確認した後、台北桃園空港に再度進入着陸をしました。天候はすぐに回復したのかこの様なクリティカルな経験をしたのは当機のみでした。この経験は機長報告書を提出し、社内の安全情報誌フライトセイフティーにも投稿しました。

日本アジア航空でも3年勤務して再び日本航空に戻りました。日本航空に移行すると同時に当時ハイテク機といわれたB747-400への移行訓練にはいりました。この飛行機のサイズは在来のB747型機と同じですが中身は全く異なっています。多くのシステムを自動化して航空機関士の仕事に取って代わりました。操縦の計器類もパソコンと同じような液晶パネルに変わり、何もかも今までの飛行方法の延長線上になく飛行方法も操作方法も画期的に変わりました。主翼の翼端に小さな上向きの翼が付いていますが、これで燃費が3パーセントも改善されると言われています。最大の変化は航空機関士の乗務していないことです。移行訓練でも故障時発生の時、誤操作防止と二人操縦士の明確な作業の分担、お互いの操作への理解が重要な要素になります。

シミュレーター（模擬飛行装置）も格段に進歩し、目視着陸で下手な操縦をするとシミュレーターと思えないようなショックを体験しました。シミュレーターで通常操作、故障時操作、緊急操作を全て習得して、シミュレーターだけで国土交通省の審査を受け、B747-400の型式ライセンスが交付されました。この飛行機はエンジン推力も大きく、燃費もよくすぐにニューヨーク、シカゴ、ロス・アンジェルス、サンフランシスコなどに就航しました。故障さえなければとても操縦しやすく快適な飛行機でした。（続く）

古き良き日中の民間友誼—(1)

和田 宏

1. 孫文と滔天

私が1965年4月、早稲田大の政治学科の新入生となって教養課程の科目を取り、3号館にある大教室に座って待っていたら、授業を始めようとした教授が開口一番、私を指さして『君ー！今、君が座っているその席に孫文が座っていたんだよ！』と大きな声で叫んだのだ。『ええーっ？』と私は、驚くと同時に歴史を刻んだ校舎で学べることに感動した。孫文は、早稲田の学生にはならなかったが、早稲田鶴巻町にも住んだこともあり、こっそりと授業を聴講したりしていたこともあったと思われる。

当時の封建王朝の清朝からお尋ね者になって日本に亡命していたその孫文（1866～1925 享年58歳）を、自宅に匿った人が宮崎滔天（本名：寅蔵 1871～1922 享年51歳）である。滔天という人物は、熊本県荒尾市の人で、私利私欲を度外



中国革命同盟会(1905年8月) (ウィキペディアから)



“強園”と名付けられた宮崎滔天・龍介・蓼苺の家



孫文の額



黄興の額



視し、中国革命支援のため東奔西走した天真爛漫な明治のロマンチシストである。滔天が書いた本『三十三年の夢』が、『孫逸仙』という名で中国語に翻訳され、これを読んだ黄興（1874～1916 享年42歳）らが孫文の存在を初めて知り、革命を志す者が孫文の元に集まるようになった。1905年に清朝打倒を目指す革命運動の団体「中国革命同盟会」が東京で結成。20世紀初頭の日本には、凡そ1万人の中国人留学生が居た。“殖産興業・富国強兵”を掲げ、国家の近代化に成功した日本は、中国人などから見れば見習うべき手本だったのである。



中華民國の100元紙幣、孫文の肖像を採用(1972年版)
〔「毎日頭條」から〕

辛亥革命が成功裡に進み、1912年新しく中華民国が出来たあと、滔天が1914年目白に家を立てる際に黄興は、お返しに金銭上の支援をした。木造平屋建ての家は建てられた100年余り前のままの佇まいである。

“部屋の欄間には孫文、黄興から贈られた自筆の額が飾られている。孫文の『明道』は、明るい道という意味と、はっきりと物を言おうという意味がある。また『推心置腹』は、心を推してお腹に置くというのだから、所謂、腹藏なく発言するとか、分け隔てなく付き合うという意味に取れる。黄興から滔天の妻・槌に贈られた額『儒俠者而流』は、学者も任侠の人もいつかは川の流れる様に流れて行くという意味と取れる。

黄興は、この新しい宮崎邸の名前を、『弢園』とつけた。この韜『弢』は『韜』の簡体字で、中国語でタオと発音し、剣や弓を収める袋、包み隠



孫文の故居公園で



「神奈川県日中友好協会」代表団。中山市招待の晩餐会で
(2011年10月21日)

すという意味である。従って滔天の家は、孫文や黄興らにとっては自分達を大事に温かく匿ってくれた園という趣旨に取れる。一方、滔天の『滔』もタオと発音し、川の水が滔々と流れると使う様に水が連なり広がるという意味があり、『滔天』で、天にも届く程勢いが漲っていると言う趣旨となる。滔天は、友達と連携し大きく広がって行こうと言う自分の名前を気に入っていたに違いない。中国の南京中国近代史遺址博物館の中庭には孫文と滔天が並んで歩く銅像が建っている。

孫文は、1924年11月28日に旧制神戸高等女学校の講堂で行った講演で、“日本は、国の近代化に成功したが、このまま進めば中国に侵略して植民地を作ったイギリスやドイツなど列強と同じになる恐れがある。今、日本は丁度その分かれ道にいる・・・”と話した。この講演を最後に神戸港から中国に帰って行った。が、3か月余り後の1925年3月12日、『革命尚未成功、同志仍須努力』と、言い残して黄泉の国へ旅立った。神戸市垂水区舞子の浜には孫文記念館がある。

孫文は孫中山とも呼ばれるが、それは孫文が散歩の道すがら、『中山』という表札を見て気に入り、孫中山と名乗る様になったと伝えられて



宮崎露荻邸新年歌会 (2020年1月14日)

いる。日比谷公園近くにあった明治天皇の実母・中山慶子の実家の表札ではないかと推測されている。中国広東省の彼の故郷には、立派な中山記念堂や彼の旧居がある。都市の名前も香山市から中山市となった。私は、辛亥革命から100年目に当たる2011年10月に『神奈川県日中友好協会』代表団の一員として、中山市や東莞市などを表敬訪問したことがある。

孫文は大陸中国では“革命の父”、台湾では“国父”と崇められており、台湾には孫文の肖像を採用した紙幣がある。

2. 宮崎龍介と柳原白蓮

宮崎滔天の息子、宮崎龍介と言えば、旧東京帝大の学生で、『全学連』を組織した学生運動の先駆者であるが、7歳年上で伊藤伝右衛門の妻・燐子（柳原白蓮）と駆け落ち結婚し、世間を騒がせた“白蓮事件”の当事者でもある。白蓮の父・柳原前光伯爵の妹・柳原愛子が明治天皇の側室となり、大正天皇を生んでいる。従って大正天皇と白蓮は、いどこ同士に当たり、白蓮の長女・宮崎露荻（1925～）さんと昭和天皇は、はどこ同士に当たる。

1929年、南京で行われた孫文の奉安大典に、

滔天の妻・^{つち}槌や龍介ら滔天の遺族が国賓として招待され、1956年の孫文生誕90年の祝典には、龍介・燐子夫妻が国賓として中国に招かれ、毛沢東や周恩来と共に臨席した。

露荻さんは、2015年、抗日戦争勝利70年記念式にも国賓として中国に招かれている。中国は、“飲水思源(水を飲むとき井戸を掘った人の苦勞を思え)”の諺通り、①滔天・槌子夫妻、②龍介・燐子夫妻、③智雄・露荻夫妻の3代に亘って、国慶節などに国賓として招待し続ける義理堅い国である。

露荻さんは、こうした一方で、母の白蓮が1934年から始めた短歌会『ことたま』や、山村御流と言う皇室と関係のある華道を継承している。短歌を趣味にしている私は、その『ことたま』の会員である。滔天は晩年、下手な講談師になったが、会員には女講談師・神田紅さんもいる。毎月1回催される歌会は、孫文・黄興の額が飾られ、二人が座ったこともあるゆかりの部屋で行われている。私はボケ防止の為に短歌を楽しみながら、この部屋に座れることを誇らしく思うのである。

しかし、この短歌会さえもコロナウィルスには勝てず、2020年3月と4月は休会となってしまった。そこで私が詠んだ短歌の一つをご披露しますと、

♪ 敷島に さ緑萌える
初夏は来ぬ
コロナの寒波 いつにや去らむ

(続く)

*断りのない写真は、筆者撮影または所有です。

今回は 2012 年 12 月に公開された河南省にまつわる映画を 1 つ紹介したい。紹介すると言っても、正月向けに、現在中国でもっとも売れている監督により撮られた映画(賀歳片)であるから、中国では広く知られている映画である。ただし、日本ではおそらく劇場公開はなされていないので、観た人は多くはないであろう。そして何より決して楽しい映画ではない。それは 1942 年(民国 31 年)河南省全体を襲った大干ばつがもたらした大飢饉の惨劇を描いた馮小刚監督による映画『一九四二』である。原作は河南省出身の著名作家・劉震雲によるルポルタージュ「温故一九四二」(『作家』1993 年 2 月号掲載)であり、映画のシナリオも劉氏が書いている。

ちょうどこの映画が全国的に封切られた 2012 年 11 月 29 日前後、私はしばらく河南省の開封に滞在していた。当時、河南省ではこの映画を巡って話題沸騰していた。その一つの証しは河南省の地元有力紙『大河報』が 11 月 26 日と 29 日の 2 度に亘って、タブロイド判 16 ページを使った大特集、「直面一九四二」と「回到一九四二」を組んでいたことであろう。今回はこの映画そのものとその原作(の日本語訳)とともに『大河報』の特集記事を参照しつつお話しすることにしたい。

さて、1942 年と言えば、抗日戦争と第二次世界大戦が激しさを増している時期である。1931 年 9 月 18 日の満州事変(柳条湖事件)より中国侵略を本格化させていた日本は、他方で、1941 年 12 月 8 日にハワイ真珠湾を奇襲攻撃し、米英に宣戦布告した。その後は南方戦線において優位を保っていたのも東の間、1942 年 6 月のミッドウェーにおける日本海軍の大敗北につづいて、同年 8 月には米軍がガダルカナル島に上陸し、1943 年 2 月に日本軍が同島から撤退することで戦況が一挙に日本不利に傾いていた。

一方、中国大陸においては、蒋介石率いる国民政府が 1937 年末に臨時首都を四川省重慶に移して日本軍と対峙していた。1938 年 5 月からは日本軍が重慶への無差別爆撃を開始し、1943 年 8 月まで、その規模はナチス・ドイツによるスペインのバスク地方ゲルニカ爆撃をはるかに超える規模だったと言われている。

こうした世界情勢の中、1942 年に河南省で発生した大飢饉により、大規模な難民の逃避行動が起こった。当時、豫北(「豫」とは河南省を指す。すなわち河南省北部)、豫東、豫南の 30 以上の県はすでに日本軍に占領されており、国民政府が治める地域はわずかに残る豫中と豫西の半分という状態であった。



DVD パッケージ(筆者撮影)

激しい抗日戦争の下、数十万の中国軍が河南省に駐留し、それを支えるための食糧および兵力が現地で調達された。その負担の重さは多くの農民を苦しめ、逃亡を余儀なくされていた。1942 年に河南全省が大干ばつに襲われた際、蒋介石は当初救済を意図的に放棄し、地元は救済のための財力に乏しく、日本軍は激しい空爆を続けているといったいくつかの要因から、大飢饉が全河南省 110 県に及んだのである。当時河南省の全人口 1000 万人中、300 万人が餓死し、300 万人が陝西省潼関から

河南省を出て西に向かう難民となり、その途中で亡くなる人も多数にのぼった。

河南省では 1942 年夏から 1943 年の春にかけてのこの大干ばつにつづいて 1943 年の秋にはイナゴの大量発生により甚大な被害も受けた。当時の河南省が経験した一連の災害を表す言葉として「水旱蝗湯」がある。水害、干ばつの害、イナゴの害に加えて、「湯」とは湯恩伯という国民党の将軍の名である。彼が軍隊のために農民から食糧などを調達し、農民を困窮に陥れたという人災を指している。

こうした史実に基づいて映画『一九四二』に描かれているのは、大飢饉から逃れようと、西へ西へと移動する避難民の姿である。はじめは徒歩と手押し車が延々と続く。飢餓としばしば襲う日本軍の空爆の中を何とか生き延びた人は洛陽にたどり着くが、そこに難民を受け入れる余裕はない。しかたなく、さらに隴海線の汽車に乗って（正確にはしがみついで）、西へと向かうのである。

一般に当時の河南省の難民の多くは陝西省の西安まで行き、さらに同省の宝鶏まで行く。そのため、宝鶏は現在でも「小河南」と呼ばれているそうである。映画では陝西省まで行きついた主人公の封建地主がそれまでに身内をすべて失い（買われていった人も含む）、西行を諦めて故郷に戻ろうとする。その途中、同じく、身内をすべて失って呆然と路上の佇む少女に出会い、連れ立って帰っていくというところで終わっている。

映画の配役は主人公の封建地主に張国立、時の河南省主席・李培基に李雪健（前回触れた映画『焦裕禄』の主演）のほか、馮作品の常連で監督の妻でもある徐帆、張国立の息子の張默らが重要な役どころを占めている。

この映画の原作「温故一九四二」には日本語訳として2006年4月に中国書店から発行された竹内実（監修）、劉燕子訳の『温故一九四二』（単行本）がある。私もこの日本語訳で読んだ。なお、この単行本にはもう一篇、同じ著者による「村のおかしら」（原題“頭人”）という中篇小説が訳出されている。日本語訳には2006年1月に原作者が寄せた「日本の読者へ」が含まれている。「日本の読者へ」は原文が中国語であるにしても、そのままの形では公表されていないはずなので、この翻訳書を読む日本人の「特権」である。

その中には「この『温故一九四二』の発表の後、中国の一人の著名な映画監督が、これを映画の脚本に改編し、怒涛のように雄大で起伏があり、人々の心を震撼させる民族の精神史を描いた映画を制作しようとなりました。脚本ができ、制作資金もできました。しかし、…今のところ浅瀬に乗り上げている状況です。」（同書7頁、7-10行目）という一節がある。

『大河報』の記事によると、「中国の一人の著名な映画監督」、馮小剛はこの作品が世に出た当初から映画

化する構想であったが、1994年、2000年、2002年と計画が流れ、2011年10月ようやく撮影に入ることができた。この間、劉氏の原作小説を馮監督が映画化した作品として携帯電話（手機）に起因する家庭内の不和と不幸を描いた『手機』（2004年）が制作されており、少なくとも二人の共同作業は初めてではない。因みに、この『手機』では馮監督の映画に欠かせない葛優ほか、『一九四二』の張国立、徐帆らが主演を務めている。

このルポルタージュは、大飢饉から河南省の農民を救ったのは日本軍が放出した食糧であったと結論づけている。もちろん日本軍は善意からそうした行いをしたのではない。蒋介石の国民政府が飢餓に苦しむ自国民を顧みないなかで、食糧を供給することで自分たちの味方に付けようとしたのである。そして、その企みは成功した（少なくとも一時は）。

しかし、劉震雲にとって、日本軍の「善行」、国民政府がしたこと・しなかったこと、などはいずれも「大きな」話である。言い換えると政治、戦争、大災害の話である。一方、劉氏が「温故一九四二」で描いたのは「小さな」話、すなわち生活さらには一人ひとりの人間の話である。そして劉氏は短期的にみれば政治と戦争が歴史を変えたが、長期的にみればむしろ被災民の食糧問題が歴史を変えたと述べている。

それにしても原作から映画まで20年近い歳月を要したのはなぜだろうか。劉氏によるとそれは、ルポルタージュと映画とでは芸術形式が違うからである。ルポルタージュでは、個々の人物は重要でなく、300万人の餓死者あるいは大量の難民が1つの総体概念として存在する。しかし、映画ではそうしたことは許されない。映画は細部を要求し、人物、物語、利害衝突、起承転結、リズムが必須である。ルポルタージュ中の各方面の人物は出会うことがない。出会わなければ、矛盾や葛藤が起きようがない。そこをどうするか。ここが映画のシナリオを書く際にもっとも苦心したところだそうである。2011年に劉震雲は馮監督らを伴って、かつてルポルタージュを書くために訪れた、河南、山西、陝西、重慶などの地を再訪した。そこででの取材によってようやくルポから映画への転換が成ったらしい。

ところで、河南省は正に中原に位置し、九つの省に接している中で、なぜ、河南人は西北に逃げるのを好

むのか。関東（山海関より東）は陝西より人口が多く物産も豊かであるにも関わらず、である。劉震雲によると「河南人は関東方向に逃げる習慣はない。『闖關東』は山東人や河北人のことである。」

話は脇道に逸れるが、ここで「闖關東」とは、昔、故郷で生活できなくなった人が山海関を越えて東北地区に生活のつてを求めて移動したことを指す言葉であり、それを題材にしたテレビドラマもある。私は2017年1月6日に旅順近郊の観光施設となっている撮影セット「闖關東」影視基地を参観した思い出がある。このセットでは「闖關東」（中篇）というテレビドラマの撮影が行われた。このテレビドラマはまだ見たことがない。因みに、私が見たことがあるのは、李幼斌、薩日娜、宋佳、牛莉らが出演する同名の「闖關東」（全52回）である。

話は難民の西行に戻るが、私は四川省成都で2008年の3月5日から10日まで（つまり、四川汶川大地震の2か月ほど前）所用があり、10日から11日にかけて夜行列車で次の目的地、河南省開封まで行ったことがある。10日の夕方7:30前、成都北駅発、翌11日夕方7:30前開封着という丸一日かけての移動であった。

当時は「温故一九四二」も知らなかったが、四川省の徳陽、綿陽、広元を過ぎて11日の朝9:20に宝鶏着、ここからは隴海線に入って、西安（11:20ごろ着）、河南省に入って三門峽、洛陽（16:40ごろ着）、鄭州（18:20ごろ着）と正に1942年当時河南人が辿ったコースの逆を行ったことになる。なお、この夜行列車の旅では無錫の男性と同室だったが、彼の話は4月号の第1回で述べたような、河南省に対してかなり差別的な内容だったのを覚えている。

さて、映画『一九四二』については、河南人にとっていくつかの疑問あるいは不満があった。まず、この映画が河南省の歴史を描いたものであるにもかかわらず、河南省内では全く撮影されなかったということである。その理由として馮監督が言うことには、各地を回ったところ河南省の変化は大きく当時の面影がないのに対して、山西省の風景が当時の河南省に近いという印象を持ったので、山西省が撮影地に選ばれたようだ。

また、河南省の映画会社はどこもこの映画の制作

に関わっていない。すなわち、配給元の華誼兄弟伝媒株式会社に対して共同出資した映画会社11社に河南省の映画会社は含まれていない。これについては、河南省の映画会社はこの映画のように河南の過去を肯定的に表現できないような映画の製作に関与することを好まなかったためらしい。『大河報』の記事では、これは河南省の映画会社の考え方が古いことを示しているとされている。

さらに、11月25日の北京での試写会以降、馮監督以下、出演者がそろって実施した巡回宣伝活動が、重慶、上海、広州、深圳など香港を含む10都市で開かれたが、なんと河南省の省都、鄭州は素通りされた。その理由は、鄭州における映画館の集客実績がそれらの10都市に及ばないためと言われている。

今回の最後になるが、ルポルタージュと映画で、そしてもちろん史実として、重要な役割を担うのは米国の週刊『タイム』の記者、セオドア・ホワイトであったことに触れたい。映画では『戦場のピアニスト』のエイドリアン・ブロディが演じるホワイトは1942年10月22日付の週刊『タイム』に河南の惨状を伝える最初の記事を書き、その後、1943年2月にイギリスの『タイムズ』紙の記者、ハリソン・フォアマンとともに、実際に河南の惨状を取材し、大量の写真を撮って、1943年3月22日の『タイム』に再び記事を載せた。これによって河南省の惨状が国際的に知れるようになった。ホワイトは重慶で蒋介石にも直接会い、ともかくも国民政府を難民救済へと動かした。

当時、中国国内でも報道がなかったわけではない。とくに1943年2月1日付の重慶『大公報』が張高峰記者による「豫災実録」という記事で河南省の惨状を伝える。さらに、翌日、同社社長の王芸生が社説“看重慶，念中原”（「重慶を見て、中原を思う」）を書いて政府の責任を追及したため、それが蒋介石の怒りをおかして、張高峰記者は河南で逮捕され、同紙は3日から5日まで3日間の発刊停止処分を受けた。

これらの歴史的記事について、私は、ぜひ原文を確認したいと思っているが、まだ果たせていない。ただ、インターネットで調べたところ『炎黄春秋』という雑誌の2013年第4期号に張高峰の「遺稿」なる文章が掲載されており、そこには以上の『大公報』を巡る事の顛末が詳しく書かれていた。

新型コロナウイルス(新型コロナウイルス SARS-CoV-2)の感染対策のために中国四川省の封鎖地域で2020年1月末から4月末まで生活した体験記をご紹介します。

今回の封鎖は初めての経験で驚いております。インターネットでニュースを見たり、ニュースに載らない各地の実際の対応状況を聞き及んで、今回の騒動を当初は異様に感じましたが、今では今後毎年のように繰り返されるかも知れないと思って受け入れています。

結論から言って、スーパーマーケット(超市)や青果市場に普段通り物が溢れていましたし、外出自粛と言っても数日毎に買い物できる(或いは配達して貰える)事と必要な用事が有る時は出掛けられましたので、閉鎖されている実感は少なかったです(個々人の生活習慣によって感じは変わるでしょうが)。また地域封鎖や外出自粛や仕事・授業の開始時期延期や店舗休業等で政府の指導が行き届いていた事に感心させられました。

1. 私が生活する地域の概況と感染リスク水準

- 重慶市：四川省に東接する特別市で日本総領事館が有ります
- 四川省/成都市/金牛区/青羊小区：私が住むマンションが有ります
- 阿壩藏族羌族自治州/小金県/四姑娘山镇：私が建てた自然保護啓蒙館が有ります
- 甘孜藏族自治州/丹巴県/章谷鎮：私が住む政府宿舍が有ります
- 聶呷郷：家内の実家が有ります



成都東駅高鉄ホーム、2019年10月(ウィキペディアから)

■感染リスク水準：湖北省・武漢市≫重慶市・成都市>阿壩州・甘孜州

- 健康証明書は重慶市・成都市→阿壩州・甘孜州へ移動する場合に必要でしたが、
- 阿壩州・甘孜州→重慶市・成都市へ移動する場合は不要でした。
- 阿壩州～甘孜州間で移動する場合に必要でしたが、重慶市～成都市間で移動する場合は不要でした。

2. 春節前後1月～2月の体験

①まさかの封鎖

今年の春節は1月25日からでした。春節の2週間位前から湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルスと封鎖の話を見聞きしていましたが、他人事のように受け止めて自分の生活圏が封鎖されるとは思っていませんでした。

春節の数日前、私の家内と息子は5日間位の予定で丹巴の実家が有る聶呷郷へ出掛けましたが、実家へ着いた翌日に「丹巴が封鎖されて成都へ戻れない、四姑娘山も封鎖された」と電話が有り、成都もこれから封鎖が進む事と本来1週間の春節休みが1週間延長された(2月9日迄)事を聞きました。丹巴の県境や聶呷郷へ通じる道路が封鎖されて出入できなくなったのですが、春節を実家で過ごす準備が完了していましたので困らないそうでした。成都に一人残った私の方も、食料については元々春節期間中の買い物が不自由なので1週間分余りの食料を買い溜めしたり冷凍してしまっていたので不安を覚え、ガーゼマスクも普段から数枚買い置きしてしまっていたので、何も買わずに本来の春節期間1週間をずっとマンションに閉じ籠りました。そして2月1日に、普段と変わらず物が溢れ値上げも無い近所の超市や青果市場で新鮮な食料を買い足しました。薬局店も開いていましたがマスクは品切れだったそうです。例年の春節明けなら繁盛している周辺の食堂街は全て閉まっています。その後も数日間隔で食料を買い足しましたが、ずっと人出が少なく出会う人全員がマスクをして黙ったまま行き交う異様な雰囲気でした。

2月3日に食堂街の一部のラーメン屋が開きましたが持ち帰りや配達だけで、電信局や雑貨屋などは

閉まったままで携帯電話機の充電器も買えませんでした。間もなく状況が更に深刻になり、超市や青果市場は出入口を一つだけにして体温測定を始め、私が住む 100 余りの事務所や居住世帯が有るマンションでも入る時に体温測定し服や靴底を消毒するようになりました。またマンションの 1 階エレベーター昇降ボタン横にティッシュが備えられ「衛生注意」の張り紙が出されました。マンションに隣接する 100 前後の居住世帯が入っている幾つかの団地も、出入口を一つだけ残して封鎖されました。食堂街が困窮しているニュースは何度も目にしましたが、団地の 1 階にも小さい食堂や理髪店や靴・服飾修理などの店が有って、これらの店も困窮していました。

② 2 月中旬に迫った旅券期限

私は 2 月 20 日に重慶の日本総領事館へ出掛けて旅券書替える予定でしたので、1 週間延長された春節休み後の仕事始めに重なって新型コロナウイルスがブレイクして道路や鉄道が閉鎖され重慶へ行けなくなる不安に駆られ(私は永住許可されていて常時有効な旅券を所持しなければなりません)、延長された春節休み明け早々で日本総領事館も開く 2 月 12 日に重慶へ新幹線を出掛けよう(成都～重慶 2 時間前後)と考えました。インターネットの記事では湖北省・武漢市行きの列車が止められているだけでしたが、記事が何処まで最近の封鎖状況を反映しているか判らず、重慶～成都の高速道路が部分封鎖された事も聞かえていたので、戦々恐々として 2 月 10 日早朝に成都東駅へ乗車券を買いに出掛けました。成都東駅へは、マンションから 15 分位掛けて地下鉄駅まで歩き、10 分位毎に来る電車に乗って 20 分位掛かります。地下鉄駅ではマスクと綿手袋姿の駅員が体温検査していました。電車は普段通り運行していて、早朝だった事と外出自粛が徹底しているせいか乗客は一両に 10 人位(全員マスク姿)だけでした。地下鉄の成都東駅を降りて新幹線の乗車券売場が開いている事を願いながら春節明けとは思えない人影疎らな連絡通路を 10 分位歩き、新幹線の成都東駅で再度体温検査を受けて構内に入り、一つだけ開かれた乗車券売場を見つけて新幹線の乗車券を難無く買えました。売場の窓は透明な板で塞がれて下端に身分証明書や紙幣や乗車券を出し入れ出来るだけの隙間が開いていて、係員もマスクとゴム手袋姿だったのが異様でした。

そして 2 月 12 日、再び地下鉄で成都東駅へ行きま

したが、この時は宇宙服姿の駅員に体温検査されました。駅員は全身を覆うビニール製の服を着込みゴム手袋を嵌めゴーグルとマスクで顔を覆う恰好でした。新幹線の成都東駅に着いて往路の成都東駅 8 時前発の列車にりましたが、ガラガラで 1 列 5 人掛けの座席に 1～2 人座っている(これもマスク姿)だけでした。例年ですと春節明けの新幹線は満席で立ち乗りしている人達も居ますので驚きました。しかし復路の重慶北駅 18 時発の列車は 1 列 5 人掛けの座席が 3 人満席(乗車率制限して乗客の間隔を 1m 保持)で、仕事を再開する準備が始まっているのだと感じました。

この日の駐重慶日本総領事館は新型コロナウイルスの状況を HP やメールで発信したり在留邦人を帰国させたり等々で忙しくしていて、私のように事前に来訪予約した日本人にだけ対応していました。そして来訪者が少なく事前に準備して頂いていたためか僅か 1 時間で旅券を更新して貰えました。また総領事館は一時閉鎖される可能性が有るそうで、領事の方々の緊張した仕事ぶりが窺えました。

復路の重慶北駅では、思い掛けない親切を受けました。改札のオバサンが私の古ぼけたガーゼマスクを頼りなく思って新品の不織布マスクを上から掛けてくれたのです。当地では時々思っても見ない親切に出くわすことが有り、この時も「謝謝！」を連発しました。この背景にはその頃話題になっていた日本からのマスク援助が有ったのかも知れません。

新幹線駅や地下鉄の駅で、駅員が宇宙服のような恰好で乗客を検査していましたが、乗客の中にも似たような恰好をチラホラ見掛けて驚きました。またタクシーは窓を少し開けて走り、乗客も運転手の横の助手席ではなく後ろの席に座って距離を確保していました。

成都へ戻った翌日、私の永住許可を管轄する甘孜州出入境管理所へ新しい旅券の写しを送るため、市内循環バスに乗って郵便局へ行きました(旅券書換え後 10 日以内提出の規約有り)。バスが普段通り運行していて、郵便も遅れながらも届けられている事を頼もしく思うと共に、旅券書換えに伴う一連の手続きを無事に完了出来て安堵しました。

③ 企業活動や公共工事等の再開と健康証明書

2 月第 3 週に入っても、企業活動も道路修理等の公共工事も殆ど再開できないようでした。また大き

な超市(床面積 5000m² 位以上)は、入店するお客に「健康証明書」を要求するようになっていました。この健康証明書は小区医院(日本の保健所相当)が発行する物で、事前に社区委員会(町役場の出張所相当)と住んでいるマンションの管理事務所で居住証明を書いて貰い小区医院へ持参します。小区医院では過去 2 週間の滞在場所をチェックされ(私のような外国人はパスポートの出入国記録も含む)体温測定してから健康証明書を発行します。特に症状が出て無ければ感染検査しません。この健康証明書は長距離バスの乗車券を買う時や感染リスク水準が低い地域(阿壩州・甘孜州等)へ入る時にも必要になります。また職場に復帰して仕事を始める時にも必要です。此の頃から、スマートフォン上で自己申告して作る「健康碼(健康状況を表す QR コード)」が使われ始めました。私は外部との通信を専ら PC に頼っていて家族と一部の友人との間でだけの通話に従来型の携帯電話を使っていますが、当地ではスマートフォンが生活必需品になっている事を実感しました。

④ 外出対策と普段の心構え

有効な治療法が無く致死率が高い病原体を扱う Biosafety Level (BSL)-4 実験施設で使われる職員の清浄方法を一部取り入れて下記の外出対策を実践しています。

i) 外出着と室内着を分け、外出時はマスク(不織布とガーゼの 2 枚重ね)と厚手の綿手袋を着用します。空気の通りが良いガーゼマスクは病原菌を遮蔽しませんが、吸い込む空気に湿気を与え暖かくして呼吸を楽にし鼻や喉の粘膜を保護します。鼻水や喉の違和感が出た時は日中も眠る時もガーゼマスクを着けます。また、喉がいがらっぽい時は当地の紅糖(日本の黒砂糖)や蜂蜜を溶かした温水を時々数 10mL 飲んで症状を改善します。

ii) 帰宅時は靴を脱いで部屋に入り(日本では当然ですが)、先ず手を洗いシャワーを浴びて頭から足の指先まで洗い口や鼻の孔を濯ぎ、靴下と下着を替えます。

iii) マスクは天日に半日以上干して再利用し、外出時に使った手袋・靴下・下着は洗濯します。

普段の心構えとして、食事睡眠休息に気を使って体力抵抗力を維持する事が一番です。自分で出来る事は自分でやって医療機関の負担を減らします。

3. 第一波収束期 3 月～4 月の体験

⑤ 3 月からテレワークやインターネット授業開始

春節休みはその後更に延長されて実質 2 月末まで延長され、3 月に入ってから企業活動や道路修理等の公共工事が少しずつ再開されて行きました。3 月初めの時点で、超市や青果市場の人出は普段の水準ですが、一般道路を行き来する人や自動車は未だ半分位で、テレワークやインターネット授業や未だ続いている外出・集会・宴会制限の影響が出ているようでした。しかし人出は 3 月中旬迄に徐々に平常に戻って行きました。

丹巴や四姑娘山は未だ封鎖されたままで私の家内や息子も成都へ戻れないため、家内は丹巴県政府の成都出張所勤務ですが丹巴庁舎で勤務し、息子は成都の高校に通っていますが丹巴でインターネット授業を受け始めました。

⑥ 3 月の其の他状況

2 月中旬に始まった、超市や青果市場の出入口を一つにして体温検査する制限や、私が住むマンションに入る時の体温検査と服や靴底の消毒は 3 月末まで続きました。2 月末から生活必需品以外を扱う店舗も開き始めていましたが、3 月に入っても大勢の人が集まるレストランや建築資材市場等は未だ開きませんでした。これらが開いたのは 3 月中旬に入ってからで、レストランは持ち帰りや配達だけをしていました。

四川省では数日間隔で新規感染者の数を携帯電話に自動送信して来ていましたが、3 月に入ってから数が零になりました。封鎖のお蔭で武漢等を除いて感染拡大が何処も収束しつつある様で、3 月中旬から市外に繋がる道路の交通制限が緩和され始めました。ただ市外へ出掛ける場合は小区医院で健康証明を書いて貰って、移動先で 10 日間～2 週間ホテルや自宅で待機観察しなければなりませんでした。丹巴のような観光地では、自費で指定されたホテルで待機観察しますので不便で、ホテルでの感染も心配でした。自然保護区の稻城や亜丁は 3 月中旬を過ぎて封鎖解除されましたが、四姑娘山は未だ封鎖されたままで、私の様に自宅が有っても入れませんでした。その一方で 3 月末に封鎖解除が進み待機観察も無くなるだろうと言う話が聞こえて来ていました。

そして 3 月末になると急に暖かくなり、間もなく訪れるであろう封鎖解除を祝うかの様に小区の彼方此方で黄色い“Robinia”や淡紫色の“Jacaranda”や白い“Clematis”等が満開になって気分を楽にしてく

れました。ただ当地では、ずっと半身に構えて慎重に対応しているようでした。

⑦ 4月から封鎖解除

3月末、学校での集合授業再開は高校3年が4月1日、中学3年が4月7日に決まり、他の学年は様子見になりました。

そして4月に入って間もなく他の学年も4月中旬に再開される事が決まり、3月中旬に封鎖解除されたものの丹巴に居た息子は家内と一緒に成都の家へ戻りました。

四姑娘山は4月1日から封鎖が解除されましたので、私は4月2日に四姑娘山へ長距離バスで戻って2週間自宅待機観察の間で当面の仕事を片付けました。バスの乗車券は乗車3日前に成都の茶店子に在る長距離バスターミナルで購入しましたが、この時は手間が掛かりました。健康証明書を持参しているのに窓口の係員は外国人の私に乗車券を発行しようとせず、暫くして現れた管理者が健康証明書と旅券の出入国記録ページを念入りに確認し私に当地での滞在履歴をしつこく尋ねました。それはあたかも健康証明書を信用して無いような対応で、最後はバスの運転手に下駄を預けたようで乗車券を発行する時「バスの運転手が拒否すれば乗車券を払い戻す」と言われました。4月2日に成都の長距離バスターミナルの茶店子でバスに乗る時、私は顔見知りの運転手に挨拶を交わしながら健康証明書と旅券をチェックされ乗車しました。そして4時間位バスに乗って四姑娘山の入口に着いた時、これも顔見知りの公安局員に健康証明書と旅券と体温を検査された後、15分歩いて自宅の自然保護啓蒙館へ戻りました。

標高3200mに在る2か月ぶりに見る自然庭園は暖かい陽光の下で薄紫色の春リンドウと黄色いタンポポの花が沢山咲いて、春の訪れを感じさせてくれました。ただ土猪^注が土地境界に張り巡らせた金網の根元を真冬の時期に掘り破って侵入したようで、庭の彼方此方が此れまでになく広く掘り返されていたので驚きました。直ぐに土地境界に張り巡らせた金網を廻ってチェックした所、隣家の畑に接する金網の根元で土が柔らかくなっていた場所が一カ所だけ掘り破られていて、其処から侵入した事が判りました。土猪にして見れば人の縄張りなど知った事ではなく、南向き斜面の枯草が敷き詰められた花株の周囲の柔らかい土の中に棲む沢山の昆虫やミミズを獲

るのは自然な事なので憎めません。私としては只守りの一手で、破られた金網の根元を補修し石ころを積んで再度の侵入を防ぐだけでした。

私は2週間自宅待機観察の後、自然保護区の事務所顔を出して幾つか手続きしてから、自動車ですら2時間位離れた丹巴の家に立ち寄り、それから成都へ戻って3か月ぶりに家内と息子に再会しました。

4. 騒動を振り返って思う事

第一波に過ぎないかも知れませんが、今回の騒ぎで、大きな都市から小さな村落まで交通封鎖したり、春節明けの仕事始めを一月遅らせたり、商店や市場を閉鎖したり出入り制限出来る当地のシステムに改めて驚き感心しました。これは此の20~30年間の当地の急激な経済発展にも繋がる話で、学ぶべき所が有ると思います。また今回培われた経験と意識は今後のインフルエンザ等の疫病抑制に役立つでしょう(実際今年の冬は風邪を引きませんでした)。

今回の様な騒ぎは今回きりで終わるとは思えず、映画で見るような困難な状況が今後永く断続的に世界を悩ますのだらうとも感じております。更に今回の騒ぎは医療問題に止まらず、国内外の政治経済システムや産業の分業(国際水平分業と国内垂直分業)に広く影響するのだらうとも感じております。一方、国と国の間で責任問題が議論されていますが、情報公開と助け合いの精神を持ち続けて欲しいものだと思っています。

日本は握手・抱擁・接吻・室内土足の習慣が無いためか(或いはBCG接種?)、感染拡大が少なくとも“Slow Start”で緩やかになり幸いでしたが、当地からでは無い欧米からの変種が入って来て感染拡大していると聞き及び大変心配しております。大変な最中では有りますが感染症対策の専門組織(日本版CDC: Centers for Disease Control and Prevention)を早く立ち上げるため、関係官庁や医師会の調整に委ねずに首相官邸の責任で強い権限を持たせられる医療従事者をトップに選び独自に活動できる人員と予算を組むべきだと願っております。

注) 四姑娘山では土猪と呼んでいますが穴熊(イタチ科アナグマ亜科イタチアナグマ属)の事で、中国語表記は鼬獾^{yóuhuān}(学名: *Melogale moschata*)。アジア・ヨーロッパ全域の温帯域に分布し、土の中に居る昆虫やミミズや蛙や木の実等を食べる雑食性動物です。

【わんりいの催し】

緊急事態宣言のため、町田市の施設が使用できなかったため、5月に予定しておりましたわんりいの催しも開催出来ませんでした。6月に関しても、未だ確定していませんが、一応予定を組みました。

ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！

声は健康のバロメーター!!

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：6月23日(火) 10:00～11:30
7月28日(火) 10:00～11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

## 中国語で読む 漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで

漢詩の素晴らしさを味わおう!

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：6月21日(日)  
7月26日(日)  
いずれも10:00～11:30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授  
現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)  
Email:ukiuki65jppj@yahoo.co.jp  
(有為楠)

### ■6月定例会暫定 (5月定例会は中止)

▼6月11日(土)13:30～(一応の予定)  
三輪センター第三会議室

▼7月号発送は、6月30日(火)10:30～  
三輪センター第二・第三会議室  
(弁当持参)

## ——編集後記——

外出自粛要請の中、皆さまはどのようにお過ごしですか。身体を動かさなくてはいけないと始めた朝の散歩で考えました。ここ数年、超大型台風・強風・線状豪雨帯・酷暑と過酷な気象に地球が壊れてしまうのではと心配しましたが、地球に根を下ろした樹木は何事も無いように、今年も美しい青葉を茂らせています。それに引き換え、人間社会は眼に見えないコロナウイルスに襲われ右往左往しています。人間とは弱い生き物だと痛感します。

6月号には、遠く中国・四川省の大川健三氏から地元におけるコロナウイルスによる都市封鎖の貴重なレポートをお送りいただきました。是非お読みいただきたいと思います。我々はこれを他山の石とし、収束を見るまでは自分の為、家族の為、そして社会の為に極力自粛した新しい生活様式を取り入れ、この苦難を乗り切って行きたいものです。

~.~.~.~.~.~.~.~.~.~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

9月以降は、当年会費1100円になります。

下記へお問い合わせください。

■問合せ：044-986-4195 (寺西)

## ‘わんりい’254号の主な目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 寺子屋・四字成語(33)兔死狐悲   | 2  |
| 「日译诗词」(3) 桃夭       | 3  |
| 「中原旅行記」(3)         | 4  |
| 海外出張の思い出(クウェート編②)  | 6  |
| 退職ジャンボ機長の回想⑦       | 8  |
| 古き良き日中の民間友誼(1)     | 10 |
| 「中原」雑感(3) 映画『一九四二』 | 13 |
| 新型コロナウイルス封鎖体験記     | 16 |
| ‘わんりい’の催し・入会案内     | 20 |